初々

雪野 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初々

【Ｎコード】

Ｎ０１７１Ｃ

【作者名】

雪野　空

【あらすじ】

高校最後の夏、主人公の麗は地元を離れ遠い田舎に帰ることに。夏休みの間田舎の祖母の家で暮らすことになったのだが、そこには無愛想な男がいた。今まで何事にも無関心だった麗だが、何故かこの男だけは気になる…。１８歳の遅い初恋が始まった。

第1話：夏休み当日（前書き）

さっそく第2昨目を書いてみました！今回はフィクションです（ΘЖΘし）　私の理想の恋…みたいな話かもしれません♪〃　連載していきたいと思いますので、読んでみてください（δ＞δ＊）

第1話：夏休み当日

―今年、私の思いがけない夏休みが始まった。―

「麗、成績どうだった？」

「いつもと変わんないよ。」

「いいなぁ、麗は頭良くて。」少しふてくされたように悠乃は言った。

「別に、たいして良くないってば。」本当にたいして良くない。怒られない程度に勉強して、付き合いが悪くならない程度に遊んで、それなりの学校に進学する予定。

何事も無難にいくのが1番だと思う。どこで覚えたのか、私は昔からそんな考えを持っていた。どこか冷めた人間だなぁ、と自分でも思う。

「せっかく今日から夏休みなんだし、そんな怒んないでよ。」そう、今日は終業式。みんな夏休みになってやや浮かれモード？

そりゃ、高校生にとっては夏休みってすごく魅力的だと思う。友達や彼氏と海に行ったり、ひと夏の恋をしてみたり…沢山の思い出が出来る。だけど、私達は今年3年生…つまり、受験生だ。受験生に甘ーい夏など存在しない。私も一応大学に行くつもりなので、それなりに夏休みは勉強しないと。

悠乃も一応受験生なんだけど…。

「そうだよね！夏休みだもんね！早く海行きたいねー。」なんて言ってる。まるで危機感がない。ま、そんなとこが好きなんだけど。

紹介が遅れましたが、私はそれなりの高校に通う今年18歳の神崎（かんざき）麗（れい）。一応性別は女。趣味特技ナシ。彼氏は…。

「あ、早く行かないと待ち合わせ遅れちゃうよ。」

「しょうがないよ。ホームルーム長びいちゃったんだし。」

「だめぇ。健ちゃん怒っちゃう。」そう言って悠乃は泣きそうな顔で私に訴える。

「はいはい。」私はそんな悠乃には敵わないので、大人しく言うことを聞いた。周りからも言われるが、私は悠乃に甘い。それは多分、私に無いものをいっぱい持ってる悠乃が可愛いと思うから。一途で素直で優しい悠乃が私は羨ましかった。
私は彼氏のために必死になれない。
「麗もこの前啓君と喧嘩したばかりでしょ。また怒られちゃうよ。」
「そうだね。」私は力無く笑った。
この啓っていうのが私の彼氏。悠乃に紹介されてなんとなく付き合った。啓はそれなりにかっこいいと思うし、リードしてくれる優しい人。でも、私がこんなんだから、啓は最近呆れ気味。悠乃の様に可愛く尽くしてあげれない。そんな私に愛想を尽かしたんだろう。
そりゃ、私だって本気の恋がしたいよ。

第2話：失恋？

「はぁ。」家に着くなり私は大きなため息を着いた。遂に今日決定的なことを啓に言われたから。『別れよう。』まぁ、こうなることは解ってたし、自分に非があると思うから文句はないけど…。『可愛いから付き合ってみたけど、お前って全然彼女っぽくねぇし。』相当いらついてたにしても、ちょっとこの台詞は頂けない。啓だって結局、彼女が欲しかったから付き合っただけで、別に私のこと好きだったわけじゃないじゃん。…悠乃の彼氏の友達だから、あんまり悪く言いたくないけど。さすがに今日のは傷ついたなぁ…。私は部屋に入ってすぐベットに寝転んだ。すると鞄に入っていた携帯の着信が鳴った。

「はい。」

「あっ、麗、大丈夫?!」かなり焦ってる悠乃の声が聞こえてきた。

「大丈夫だよ。」

「あたしも今健ちゃんから聞いて、びっくりしちゃって…。」なんだか悠乃の方が泣き出しそうだ。

「本当に平気だから。なんとなく感づいてたし。」

「あのね、庇うわけじゃないんだけど…啓君、本当に麗のこと好きだったんだよ。いつも麗の気持ちに不安がってて、励まし続けて来たんだけど…」

「あたしが変わらなかったんだね。」思えば啓と付き合ったのは去年の夏だったっけ。もう、1年が経ってたんだね…。

「あたしにはうまくやってるように見えたけど、麗は啓君のこと好きじゃなかったの?」悠乃の直球の質問に私は何にも言えずにいた。自分でも、よくわからなかったから。

「わかんない。ごめんね。」

「ううん、麗が謝ることじゃないよ。ただ…あたしも友達なんだし、思ってることがあったら正直に言ってね。」

「…うん。わかった。」そう私は返事をしたけど、ちょっと自信がなかった。だって悠乃は素直で裏表がないのに、綺麗なことしか言わない。でも、私は無関心にならない限り、汚いことも平気で言ってしまう人間になってしまいそうだから。

「じゃあ、またね。」そう言って私達は電話を切った。

私はゆっくり目をつむった。

第3話：田舎に帰ろう

「れーい！ごはーん！」制服のままいつの間にか寝てしまっていた私は、母の大声で目を覚ました。
「ごめん、今作るから。」
「今日は私が作ったから早く食べちゃって。」
「えっ、お母さん作ったの？」
「今日は成功したから大丈夫！早く来てね。」そう言い残して母は部屋を出た。
正直、食べたくない。うちの母は昔から仕事熱心で、料理や掃除は苦手だった。その代わり父が家のことはたいていやっていた。…その父も私が中学に上がるときに交通事故で死んでしまった。
父の仕事を引き継いだのが私。母は前以上に仕事に一生懸命になり、私は一人で過ごすことが多くなった。珍しく今日は早いお帰りだ。とりあえず普段着に着替えて私はリビングに向かった。
「あれ…？上手だね。」テーブルに並べられた夕食を見て私は驚いた。母にしては上出来だ。
「私だってやればできるんだから。」
「ふーん。」私は椅子に座り用意されていたご飯に手を付けた。……。
「…買ってきたでしょ。」
「あれ？ばれた？」向かいに座る母は得意げに笑った。まったくこの人は…。
「まぁ、おいしいからいいけど。そういえば何で今日早いの？」
「そんなの大事な娘に会いたかったからに決まってるじゃーん。」
「はいはい。」私はこっそりとため息をついた。何でこの人は４０にもなってこんなに落ち着きがないんだろう。
「あ、大事な話があるんだった。」
「…何？」

「麗、夏休みの間おばあちゃんとこにお世話になってね。」
「何で？」私はご飯を食べながら適当に話を聞いていた。
「だって仕事で暫く帰って来れないんだもん。」
「そんなの毎度のことじゃん。」
「だって女の子一人で留守番なんて危険でしょ？」
「それに気付くならもっと早くしてほしかったんだけど。」
「たまには環境の違うところで勉強した方がはかどるんじゃない？」
「…それはいいね。」ようやく出た私のＯＫに母は喜んでいる様子だった。
「京都だっけ？」
「うぅん、そっちじゃない。」…え？そっちじゃない？
「お父さんの方の実家。」……それって…。
「あの電波の入らない？」
「うん。」
「コンビニまで車で１時間かかる？」
「うん。」
「電車が１日２本しか走らない？」
「うん。よく知ってるねー。」
「……。」どうやら私はとんでもない田舎に行くことになるようです。

第４話：一つ屋根の下？！

電車を乗り継いで乗り継いで、やっとたどり着いた無人駅。ここから道なりに歩いて３０分くらいしたら、神崎の標札が見えるらしい。本当に果てしなく続くような一本道。周りは畑と田んぼしかないし、民家もあまり見つけられない。でも…空気は凄くおいしい。この緑だらけの景色も嫌いじゃない。

「あつ…。」私は重たい荷物を肩にかけ、真夏の太陽の下歩き始めた。なかなかこんな景色の中歩く機会もないし、楽しんだ方が得だろう。見たこともないような蝶や綺麗な花。まるで私は幼い頃に戻ったみたいに澄んだ気持ちになった。

そんな感じで実家に着くまでの３０分はあっという間だった。

「神崎…ここ？」

「麗ちゃんかい？」

「わっ。」びっくりして振り向くと、小さなおばあちゃんがにっこりと笑って立っていた。

「おばあちゃん…？」

「んだよー。よく来たねぇ。」まるで太陽みたいに笑うおばあちゃんに、私はなんだか癒された。おばあちゃんって暖かいなぁ。

「あいやー。早く着替えぇ。」私が汗だくだったからか、おばあちゃんはそう言って私を招き入れた。家の中は思ったより涼しく、風鈴の音が心地よく響いていた。

「ここで着替えらい。」

「うん。」おばあちゃんに案内された部屋に入り、私は鞄からＴシャツを取り出した。そして、タオルで汗を拭いながら着替えていたときだった。

「…あ？」扉が開いたかと思ったら、目の前には見たこともない男が立っていた。もちろん私は下着姿で…。

「わぁっ。」私は慌ててしゃがみ込み、とりあえずＴシャツで体を

隠した。男は何も言わず大きな音を立てて扉を閉めた。
「…誰？」また現れないうちに私は急いでTシャツをかぶった。変質者って田舎にもいるの…？でも若かったし…。
疑問を抱きながら私はおばあちゃんを探した。廊下に気持ち良い風が吹き抜ける。風が入ってくる方向を探していると、なんだか楽しそうな声が聞こえてきた。
部屋を覗くとおばあちゃんと、もう一人仲の良さそうなおばあちゃんが座っていた。
「着替えたかい？れいちゃんもこっちにおいで。」私に気付いたおばあちゃんが手招きして呼んだ。
「ねぇ、おばあちゃん。変な人いたんだけど…」隣にしゃがみ込みそう言うと
「誰が変な人だ。」後ろからさっきの男が現れた。
「あ、さっきの…」
「たいちゃん、来てたのかい。」たいちゃん…？
「みっちゃんとこの孫だよ。」たぶん、話の流れでいくと、みっちゃんっていうのがおばあちゃんの隣にいる人のことで…変な人扱いした人はそのお孫さん。…失礼なことを言ってしまった。
「ごめんなさい。」私はとりあえず男の人に謝った。
「…。」男は何も言わず部屋を出ていく。相当怒っているのだろうか。
「気にすることないよぉ。太陽は恥ずかしがりだからねぇ。」
「そうなんですか…。」だと、良いんだけど…。
その後おばあちゃん達と話していたら、だんだんいろんなことがわかってきた。おばあちゃんの隣に座っている『みっちゃん』は幼なじみの光代さんのこと。光代さんとおばあちゃんは旦那さんを亡くしてから、ずっと一緒に住んでいたらしい。そして、光代さんの孫の太陽君も。太陽君は私と同い年で今は受験勉強を頑張っているそうだ。
で、問題なのはここから。おばあちゃんと光代さんと太陽君と私が

一つ屋根の下で、仲良くこれから1ヶ月過ごさなくてはいけない。
太陽君は目付き悪いし、愛想悪いしうまくやっていく自信ないなぁ…。
「はぁ…。」

第5話：険悪ムード

「おいしー。」夕食の時間になり、おばあちゃんたちにご飯作ってもらったら…すごく美味しい！野菜とかは自分で育てる方がやっぱり美味しいのかな…。

「そうかい。いっぱい食べらい。」おばあちゃんの言葉に頷きながら、私はご飯を黙々と食べた。本当はもっとはしゃぎたいけど、隣にむすっとしてる太陽君がいるから…なんか…微妙。

「太陽、またあんた人参残して。ちゃんと食わい。」

「…無理。」光代さんの言葉をあっさり拒否。なんて失礼な人だ。

「食べないならあたしにちょうだい。」

「は？」

「食べないんでしょ？」何やら驚いている太陽君をシカトし、私は勝手に人参を盗んで食べた。

「あ、おい。それ、俺はし付けた…」

「…え？別にそれくらい…。」

「これだから都会の女は尻軽で困る。」ため息を着きながら、太陽君はそう言った。ちょっとイラっ…。

「ふぅん。ずいぶん大きな枠で人を見るんだね。」

「あ？」

「都会の人がみんな尻軽な訳無いでしょ。あたしはいいとして、他のみんなに失礼だから、そんなこと言わないで欲しい。」私も負けじと、むすっとした態度で言い放つ。そんな険悪ムードにおばあちゃんたちは戸惑っているようだった。

太陽君はその後なんの反抗もせず、ただひたすらご飯を食べていた（人参は残して）。私もあえて何も言わないでおいた。これ以上言い争う必要ないし、面倒だし。太陽君もそう思うから黙ってるんだろう。

「ごちそうさま。」皿に人参を残したまま、太陽君はそう言った。

人参のことはおばあちゃん達も触れなかった。もしかしてまた喧嘩が勃発すると思って、黙ってるのかな。なんだか、おばあちゃん達まで嫌な空気にしちゃったみたい。これは反省。
明日から不安だなぁ、と思ったときだった。皿を持って立ち上がる瞬間に、太陽君は小さな声で私に言ったのだ。
「悪かった。」と。

第6話：優しさ

私の一人だけ離れた部屋で寝ることになった。勉強の邪魔にならないようにと、おばあちゃん達が気を使ってくれたのだ。
夜は涼しく、窓から入ってくる風が体温を調度良くしてくれる。これなら、勉強がはかどりそう。
「おい。」ドアの外から太陽君の声が聞こえた。…それにしても、偉そうな声。
「はい？」ドアを開けると、そこには太陽君が上半身裸で立っていた。
「…。」私は思わず目を反らす。なんだか綺麗な身体。
「…変態。」
「なっ」
「風呂入れだって。」私に反撃させずに太陽君はすたすたと帰って行った。
「どっちが変態だよ。」私はそう呟いてお風呂の準備をした。
なんだか太陽君っていちいちカンに障る人。こんなに苛々したの久しぶりかも…。
私は着替えを持って部屋を出た。そして、ふと思った。…お風呂どこ？
人気のない廊下を歩いていくと、台所から光りが漏れてるのが見えた。
「おばあちゃん？」私はそっと台所を覗く。
「…覗き。」
「ち、ちがっ。」台所ではまだ半分裸のまま、太陽君が水を飲んでいた。確かに覗きみたいだ…。
「てか、人のこと変態扱いする前に、自分が服着ればいいじゃん。」
「風呂上がったばっかりで暑い。」
「…そっか。それより、お風呂ってどこ？」

「…どっか。」太陽君は飲み終えたコップを流しに置き、台所を出た。
「どっかって、どこ？！」苛々して私がそう言うと
「うるさいな。今教えるっってんだろ。」と返事が返って来た。…教えるなんて言ってないし…。
半分納得のいかないまま、口論するのが面倒なので私は黙って後ろを歩いた。
私の周りにはこんなに無愛想な人もいないし、喧嘩売ってくる人もいないから、太陽君みたいなのは初めてだ。だから、対処方がわからない。まぁ、どうでもいいけど。
「ここ。」
「どうも。」なんだか気分が悪かったので、私は小さな声でお礼を言った。
「ん。」太陽君は短く返事をし、その場を離れようとした。
「あっ、ちょっと待って！」
「…？」太陽君が不思議そうな顔で振り返る。
「…電気どこ？」
「…自分で探せ。」呆れて帰ろうとする太陽君の腕を引っ張る。
「そ、そう言わずに…ね？」
「…あんたもしかして暗いとこ苦手？」思わずぎくっとした。大正解。
「はぁ。」太陽君はため息を着いて、風呂の電気を付けた。
「ごめんなさい。」
「…ん。」
太陽君は静かに部屋に帰って行った。
ちょっと優しかった…かな。

第7話：見透かされた

田舎生活1日目。
今日は朝6時に起床。って言っても誰かに起こされた訳じゃないけど。自然と目が覚めてしまったので、あえてそのまま起きてただけ。いつもなら暇なとき携帯をいじったりしてたけど、ここは電波入んないし…。やっぱり勉強？
私は大きく背伸びをして窓を開けた。
「んー。」気持ちいい天気。とりあえず服を着替えて、肩まで伸びた髪を結ぶ。私はタオルを持って洗面所へ向かった。
廊下はしんと静まり返ってる。みんなまだ寝てるのかな？
「あ。」洗面所に着くと、太陽君が先に顔を洗っていた。ずいぶん早いお目覚めで。
「おはよ。」私の挨拶に太陽君は返事を返さず、タオルで顔を拭いている。
「おはよ！」2度目の挨拶に
「…ん。」とだけ太陽君は返事をした。挨拶かどうか判断しにくいけど…ま、いっか。
「意外と早いんだね。」
「たまたま。」
「ふぅん。ところで、なんでそんなに愛想悪いの？」私は疑問に思ってることを直球で問い掛けた。
「あ？あんたに言われたくねぇ。」
「あたし無愛想ではないよ。」私は少しむっとしてそう言った。
「つまんなそうな顔してっけど。」私はどきっとした。周りからはそう見えてるんだ…。決してつまらないわけじゃない。ただ、興味がないんだ。私だってなにかに夢中になったり、些細なことで一喜一憂してみたい。
太陽君は無言で立ってる私にかける言葉を探してるみたいだけど、

結局なにも見つからなかったのかそのまま帰って行った。
初めて心を見透かされた気がしたから、びっくりして何も言えなかった。太陽君って意外と人のこと見てるんだなぁ。
ちょっと意外。

第8話：成功

『つまんなそう』。この一言を私は怒ってるわけじゃない。ただ本当に驚いただけ。それだけなんだけど…太陽君は少し気にしてるみたい。朝ご飯の時も昼ご飯の時も、何やら気まずそうにしていた。太陽君にそんな態度を取られたら、私だってどうしていいのかわからなくなる。だから尚更ぎくしゃく。

なんか変な感じ。

「…おい。」部屋で勉強していると、ドアの外から遠慮がちな太陽君の声が聞こえてきた。私はゆっくりとドアを開ける。

「すいか。」私と目を合わせないまま太陽君はそう言った。手にはスイカの皿が2つある。

「ありがと。」私がそう返事をすると、太陽君は部屋に入りどかっと腰を下ろした。…一緒に食べるつもりかな？私は疑問に思いながらも太陽君と向かい合って座った。

「…朝。」

「ん？」

「気にしてっと思わなくて…」

「あ、別に気にしてるわけじゃないよ。」私は首をぶんぶんと横に振った。早くこの気まずい空気を吹っ飛ばしてしまいたかった。

「初めて言われたからびっくりして、なにも言えなかっただけ。」

「あんまいないよな。あんたみたいな人。」太陽君は豪快にスイカに噛り付きながら言った。

「俺は好き嫌いはっきりしてるし、態度に出すから。」

「…それってあたしが嫌いだって遠回しに言ってるの？」

「基本、あんまり女は好きじゃない。」…なんだかフラれた気分。ちょっとショックな気がするのはなんでだろう。

「でも、あんたのことは嫌いじゃあねぇよ。」…それって喜ぶべき

なんだろうか。つまりは普通ってこと…だよね。
「始めはあんたみたいなやつは、田舎を馬鹿にすると思ってたけど、そうでもないみたいだし。」
「あたし好きだよ。ここも、おばあちゃん達も。」
「…ふぅん。早くスイカ食えば？」太陽君の一言に私ははっとした。すっかりスイカの存在を忘れていたのだ。話しに夢中になってたのかな…。
「いただきます。」私はスプーンで一口スイカをすくって、口に運んだ。
「…おいしー。」正直、あんまりスイカって好きじゃなかった。でも、このスイカは凄く美味しい。なんだか感動してしまう。
「がっつけば？」
「えっ？」さすがにそれはだらし無いような気がする。けど…。
「うん！」あまりの美味しさに私はスプーンを使わずに、がっついた。でも、意外とこっちの方が難しい。スイカの汁がだらだらとこぼれた。…失敗？
「…ははっ、へたくそ。」太陽君はそう言って私を馬鹿にするように笑った。
…あれ？太陽君の笑顔って意外とかわいい。ちょっと得した気分。もしかしてこれって、ある意味成功？

第9話：蛍

「やる。」
「…。」夕飯の時間、今日もおかずには人参が…。案の定、太陽君は綺麗に人参だけ残し、皿を私の方に寄せてきた。
「こんなに人参ばっかりいらない。」私は皿を押し返す。
「美容のためだ。」…失礼な人だなぁ。遠回しに不細工って言いやがった。私は苛々する気持ちをどうにか抑えて、太陽君の人参に手をつけた。こっちに来てから苛々することが多くなった気がする。まぁ、１００％太陽君のせいだろうけど。
「無理に食べなくてもいいんだよぉ。」おばあちゃんが心配そうに私に言った。
「大丈夫だよ。人参好きだから。」
「そうかい？」
「おばあちゃんが作ったご飯だもん、残したくないし。」私がそう言うとおばあちゃんと光代さんは嬉しそうに笑った。おばあちゃん達の笑顔があまりにもかわいくて、私も一緒ににっこり笑ってしまう。こういうところで育ったから、きっと綺麗な心なんだろうなぁ。でも、なんで太陽君は素直じゃないんだろう。こんないい所で暮らしてるのに。私は横目でちらっと太陽君を見た。
「なんだよ。」
「別に。」
「なんか怒ってんの？」その言葉に私は首を横に振った。本当は可愛くないって言われたのが、ちょっとむかついたんだけど。
「顔に出てっけど。」
「怒ってないよ。」
「…ふぅん。スイカまだ余ってるけど…」
「食べる！」スイカに敏感に反応した私をみんなが笑った。つい、昼に食べたスイカの美味しさが蘇って…リアクション大きかったか

な。私は恥ずかしくなって俯いた。
「そんなにうまかったか？」
「…うん。」私が小さく返事をすると、太陽君は今までとは違う笑顔を一瞬見せた。おばあちゃん達に似た優しくて暖かい笑顔。
いつも無愛想な顔をしてるから…思わずギャップにやられちゃうじゃん。ドキドキしてるのがばれてしまいそうで、私はおもいっきり目をそらした。
「あ？」
「ちょっと、目にゴミが入った。」私はそんな小学生レベルの嘘で、この場を乗り切ろうとした。
「食べるときは縁側で食べらい。蛍が見れるかもしれんよぉ。」
「蛍？！」おばあちゃんの言葉に私は驚いた。蛍って絶滅したんじゃないの…？
「麗ちゃんは蛍見たことないのかい？」
「うん、ないです。蛍かぁ…見てみたいなぁ。」
「運がよければな。」私がうきうきしていると、太陽君は突然口を挟んできて夢を壊した。
「きっと見れるよ…。」私がそう言って落ち込むと、太陽君は困ったように頭をかいた。
「まぁ、気長に待てば見つかるかも。」
太陽君は少し恥ずかしそうに呟いた。

第１０話：ハマっちゃいそう

昨日の夜、結局蛍は現れてくれなかった。意外と最後まで粘ったのは太陽君の方で…なんだかちょっと嬉しかった。
部屋に戻ったのは、確か１２時近くだったと思う。スイカを食べながら蛍を待ってる時間、太陽君とはあまり会話は無かった。でも、それは決して嫌な雰囲気とかじゃなくて…なんだか妙に落ち着ける時間だった。
太陽君はちょくちょくカンに障ることを言ってくるけど、本当は優しい人なんじゃないかなって思う。
朝ご飯を食べ終わった後、玄関で靴を履いている太陽君を見つけた。
「どこ行くの？」太陽君は後ろを振り向かずに
「畑。」と言った。
「…あたしも連れてって？」
「あ？」さすがに今回はびっくりしたのか、振り向いて私の顔を覗き込んだ。
「え、あたしじゃ役に立たない、とか…？」
「いや、役に立たないどころか邪魔だけど。」
「ひどっ。」
「まぁ、いいや。連れてくから髪だけでも結んで来たら？」
「…うん。」所々気になる台詞はあったけど、私は素直に返事をした。太陽君がそういうことを言ってくるのは照れ隠しだと思うから。太陽君ともっと話したいな。もっと太陽君のこと知りたい。こんなワクワクする気持ち初めて。
髪を結んだ私は玄関で待ってる太陽君に駆け寄った。太陽君は何も言わずに歩き出す。私はその後ろを黙って歩いた。
日に焼けた小麦色の肌とか、ごつごつした細長い指とか、思わず抱き着きたくなるような広い背中とか…なんかかっこいいなぁ。自然体で男らしい人。考えれば考える程、ハマってく。

なんか…やばいかも。

第１１話：猿っぽい

暑い…とんでもなく暑い。帽子被ってくれば良かったかな…。
畑に着いた私は太陽君の教え通りにトマトを収穫した。畑はとんでもなく大きくて、すぐ終わると思っていた仕事は何時間も続いた。
正直、暑くて辛かったけど弱音を吐く気にはならなかった。
太陽君に面倒だって思われたくなかったし、元々何かを途中で投げ出すのは、あまり好きじゃないから。
「あんた頭ヒリヒリしてない？」急に日陰ができたと思ったら、いつの間にか太陽君が近くで立っていた。
「ヒリヒリ？」
「頭の割れ目真っ赤だけど。」
「えぇ？！」私はびっくりして両手で頭を隠した。
「馴れないことすっからだろ。」
「うっ…。」
私がしゃがみ込んで唸っていると、太陽君は自分の首にかけていたタオルを私の頭に落とした。
「…？」
「巻いとけば？」
「……。」私はタオルを縦に細くたたみ、おでこに当てた。
「なんでハチマキ風だよ。」
「え〝っ…」自分のしたことが間違いだと気付いて、私は顔を真っ赤にした。どうやら太陽君はつぼに入ったらしく、お腹を押さえて笑っている。
「こうだろ。」そう言って太陽君は私の手からタオルを奪い、広げた状態で頭の上に乗せた。
「…ぷっ。泥棒みてぇ。」タオルの端と端を鼻の近くで結んで、太陽君はまた大笑いした。
「人の顔で遊ばないでよ。」私は鼻の下の結び目をほどき、少し怒

ったように言った。本当は全然怒ってなんかいない。そんなことより、太陽君がこんなに笑ってくれたことの方がよっぽど嬉しかった。
「それじゃあ、タオル落ちんだろ。ちゃんと結べ。」今度は顎の下でタオルを結ぶ。
「…。」
「ぶぶっ。すっかり田舎もんだな。」
「もうっ。」私はそれをほどかずに、またトマトを取り始めた。
「あんた、猿っぽいな。」未だに笑ってる太陽君は腹を押さえながらそう言った。
「っぽくない！」せめてもっとかわいい動物に例えてほしかった…。兎とか猫とか。私がこっそり落ち込んでいると、笑い終わった太陽君が
「怒んなよ。」と言った。
「別に。」しれっとした態度で私は言い放つ。
「いいじゃん、猿。俺好きだよ。」私の顔を見てまた面白くなったのか、太陽君は必死に笑いを堪えながら言った。
全然意味は違うのに、太陽君の言った『好き』って言葉に思わずドキッとした。
なんか、馬鹿みたい。
恥ずかしいなぁ…。

第１２話：嫌いじゃねぇよ。

「ねぇ。何で女の子好きじゃないの？」縁側で蛍を待っていた私は、隣に座っている太陽君に問い掛けた。
「めんどくさいから。いちいち泣いたり怒ったり。」太陽君の返答に私はぎくっとした。だって…私は最近いちいち怒ったりしてるから。やっぱ、そういうのってめんどくさいんだ…。
「あ、あんたは別だけどね。」私が落ち込んでいるのに気付いたのか、太陽君は前を向いたままそう言った。
「あんた本気で怒ってるわけじゃねぇだろ？」
「まぁ、そう…だけど…。」
「あんたのことは嫌いじゃねぇよ。」太陽君はそう言って背伸びをしながら寝そべった。私はなんだか恥ずかしくて太陽君の顔を見れないでいた。だって…今のってちょっと嬉しいセリフなんじゃないかな？
「からかうと面白いし、暇つぶし的な？」
「えぇ？！そういうこと？！」私が思わず振り返ってそう言うと、太陽君は小悪魔っぽく笑っていた。本気なんだか冗談なんだか…。私はため息を一つついて空を見上げた。もう何回か見たけど、本当に綺麗な星空。やっぱり田舎ってこういうところがいいんだろうな。
「どんな子が好き？」
「あー？何だよ、突然。」
「なんか気になって。」
「んー。」太陽君は眉間にしわを寄せて、しばらく唸っていた。
「わかんね。」そして、悩んだ結果の答えがこれ。
「えっ、何で？」
「俺、人好きになったことねぇし。」
「そう、なんだ…。」嬉しいような悲しいような答え。もし、私を１番に好きになってくれたらなぁ…。太陽君に彼女でもいてくれた

ら、きっとこの気持ちは萎んでいってくれるのに。どんどん好きになってる。
人を好きになるのってこんな感じなの？少しでも長く一緒にいたいって思ったり、くだらないことでも知りたいって思ったり…。隣にいるだけでこんなにドキドキするものなんだ…。
私、今まで何してたんだろう。付き合ったってうまくいかないのは当然だ。私が相手のことをちゃんと好きじゃなかったんだから。
「いい恋、できるといいね。」私がそう言うと
「ん。」と短い返事が返って来た。

第１３話：魅力的になりたい

今日も天気は晴れ。最近は暑さにも慣れ、畑仕事もちゃんとこなせるようになってきた。一つ一つ太陽君に教わりながら…おばあちゃん達と笑いながら、そうやって仕事をするのはすごく楽しい。今はここで過ごす毎日が愛おしくてしょうがないよ。

「いいものやるよ。」そう言って太陽君は、にやにやしながら近づいて来た。嫌な予感…。

「わ〝っ。」太陽君からいも虫を投げられ、私は変な声を上げた。私の奇声が面白かったのか、太陽君は腹を抱えて笑い出した。

「ちょっと、これ拾ってよ。」

「怖ぇーの？」馬鹿にしたような顔で太陽君は言う。

「怖いっていうか…触りたくない。」

「にしても今のリアクションはねぇわ。」

「可愛くなくてすみません。」私はぷいっとそっぽを向いて、嫌味ったらしくそう言った。

「怒んなって。」太陽君は私の頭を軽く殴ってからいも虫を拾った。そのいも虫を畑から離れた草村目掛けて投げ飛ばす。これって生殺し…？

「あーぁ。いも虫に呪われるよ。」

「あれじゃあ死なねぇよ。呪われるとしたらあんただな。…奇声あげたし。」太陽君は必死に笑いを堪えてたみたいだけど、肩は細かく揺れていた。

「そんなに変な声じゃなかったよ。」

「俺的につぼ。あんたおもしろいな。」

たまには面白いじゃなくて、可愛いとか言われたいんだけど…。太陽君はどんな行動を可愛いと思うんだろう。

今まで私は男の人にどう思われようと関係なかった。そういう私でもいいと言う人がいたから付き合って来たし、無関心な私に愛想を

尽かされたから別れた。相手のために自分を変えることは好きじゃなかったし、素の自分と合わない人なら無理に付き合わなくてもいいと思ってたから。
でも、太陽君が気になり出してからちょっとずつその気持ちは変わって来た。太陽君に可愛いって思われたいし、好きになってもらいたい。だから、もっと魅力的な女にならなきゃって思う。
恋をすると女は綺麗になるって言うけど、今はそれがよくわかる。
「ここに来たのがあんたで良かった。」
「えっ？」太陽君のセリフを思わず私は聞き返していた。だって…今のめちゃめちゃ嬉しいから。
「なんでもねぇよ。」太陽君は小麦色の頬を、少しだけ赤く染めて下を向いた。

第１４話：夢

夜に蛍を待つのが、私と太陽君との間で自然と日課になった。
私はその時間がとっても好きで、待ち遠しくて…顔に出てないかな？ばれてないかな？ちょっと心配。
「大学行くの？」
「ん。本当はこっから出たくねぇけど、どうしても行きたい大学あるから。」
「どこ？」私が首を傾げて尋ねると、太陽君は鼻で笑った。
「教えねぇ。」
「最低。」私が文句を言ったにも関わらず、太陽君は馬鹿にするように笑った。…こういうとこ嫌いじゃなかったりする。
「あんたは？」
「教えねぇ。」私は太陽君のまねをしてそう言った。
「最低。」太陽君も私のまねをした。なんだかくだらないけど、それが笑えた。
「あたし、保育士になりたいんだよね。生まれて初めて持った夢だし。」
「夢のない子供だったんだな。」
「まぁね。」
「否定しねぇのかよ。」私の頭を一発殴って太陽君は言った。
「いたっ。…ほんとのことだもん、否定しないよ。」私は昔っから大人びてるって言われてて、子供のくせに妙に現実的なことばっかり考えてた気がする。お父さんにもお母さんにも甘えちゃいけない気がして…だからあたしは彼氏に上手に甘えることができない。どうやったら可愛く甘えられるんだろう。逆に、どうゆうのがうざいって思われるんだろう。みんなはどうやってそれを見分けてるのかな。
「まぁ、今夢が持てたんならそれでいいんじゃね？俺も最近だし、

行きたい大学見つけたの。」
「そうなの？」
「んー。今まで勉強してなかった分かなり焦ってるけど。」
「あたしもS大受かるといいけど…。」私がため息を着きながらそう言うと、太陽君は一瞬固まっていた。
「S大って、東京の？」
「うん。知ってるの？」
「…まぁ、名前くらいは。」なんだか変な感じだけど、私はあえて何も言わなかった。太陽君が『聞くなよ』って心の中で言った気がしたから。
「今日も来ねぇな。…戻るぞ、麗。」
「えっ！？」ゆっくりと立ち上がった太陽君を私は見上げる。今、私の名前呼んだ…？
「早く立てよ。」
「今、名前で呼んだ？」
「…気のせいだろ。。」太陽君はそう言って、私を一人縁側に残して帰っていった。
私はしばらくその場から動けずにいた。だって…好きな人に名前を呼ばれることが、こんなに嬉しいなんて知らなかったから。私、頑張ってもいいのかな…？

第１５話：ライバル出現（前書き）

だいぶ更新遅れました←←身内でいろいろあって…すみません（・ω・、）またゆっくりですが更新していきたいと思います！

第15話：ライバル出現

「たこやき食べたい。」
「あんた、さっきも食べなかったっけ？」手に焼きそばの入ったパックを持って、太陽君はため息をついた。
今日は近くの街の夏祭りに来た。近くって言っても結構時間かかったけど。なんだかデートしてるみたいで嬉しいな。
「にしても、本当に人多いな。」どうやら人込みが苦手らしく、太陽君は苛々しながらそう言った。
「お祭りだもん。」
「だから来たくなかったんだよ。」…楽しんでるのは私だけみたい。
「あんたのわがままだから聞いたんだからな。」
「え？」
「祭なんて何年ぶりだかわかんねぇ。」りんご飴をくわえてぼけっとしてる私をほっといて、太陽君はすたすたと歩いて行った。なんか最近太陽君が嬉しいことを言ってくれる比率が上がった気がする。それとも、私が小さなことで喜んでるのかな？
すると突然、前を歩いてる太陽君が振り返った。
「やべっ。」
「えっ？」太陽君は私の腕を引っ張って、今来た道を戻ろうとする。
「えっ、何？！ちょっと…」
「太陽！なにやってんだよー。」そう呼び止められて、一歩走りかけた太陽君と私は立ち止まった。
「…お前、か、彼女？」友人らしき人がきょとんとした顔でこっちを見ている。なんか勘違いしてるみたい。
「親戚だよ。」太陽君は困った顔でそうとだけ言った。
「だよなぁ。お前が彼女作るなんてありえないよなぁ。」
太陽君の友人らしき人は、うんうんと頷きながら言う。私は太陽君の反応を見ながら、とりあえず黙っていた。

「あれっ、太陽！？」太陽君の友人らしき人の後ろから、小柄で可愛い女の子が走って来た。そばに来て太陽君と並んでる私を見るなり、女の子はきつい表情になった。
「太陽、人込み嫌いだから祭には行かないって言ってたじゃない。」
「どうせすぐ帰るよ。」
「この人に誘われたから来たの？」女の子はじろりと私を睨む。どうやら、この人私のライバルみたい。嫌だなぁ…こういう争い。
「せっかく会ったんだし、一緒にまわろうよ。」女の子はそう言って、半ば無理矢理太陽君を説得した。
あーぁ、なんでこうなっちゃうかなぁ…。

第１６話：邪魔者

４人でまわり始めてから３０分が経った。なんだか知らないけど、太陽君はさっきの女の子に独り占めされて…私はよく知らない太陽君の友達と後ろを歩いていた。
「楽しそうっすね。」
「そうですね。」
「…。」
「…。」楽しそうに話す太陽君と女の子の後ろで、私たちは他人行儀な会話をしていた。
それよりも、この人…あの子のことが好きなんじゃないかな。時折悲しそうな、悔しそうな目で２人を見ている。だいたい、２人で祭に来てるんだから、なんらかの関係があったっておかしくないし。…切ない片思いみたいだけど。
「新田。トイレってどこ？」太陽君は突然振り返ってそう言った。
「あっち。」
新田さんの指差したほうへ、太陽君は何も言わず歩いて行く。
「えっ、太陽く…」
はぁ。３人とか気まずいんですけど…。私はこっそりため息をつき、肩を落とした。
「わり、俺も。」
そう言うと、新田さんは太陽君の後を追い掛けるように走って行った。
…嫌な状況。
「太陽とどういう関係？」女の子はさっきまでとは違う、低いトーンで問いかけてきた。
「親戚…かな？」
「どこの人？」
「まぁ、ここらへんじゃあないとこ。」

「ふぅん。」
って言うか何でこんなに偉そうなんだろう…。怒りってあんまり感じたことないけど、少しいらっとするなぁ。
「太陽のこと好きなの？」
「…。」ストレートな質問に私は答えを返さなかった。そんなこと、関係ないんじゃないかなぁ…。
「太陽、今医者を目指して頑張ってるの。…親がいないことは知ってるでしょ？」
「…うん。」確か3年前に葬式の連絡が来た。私は休みを取っていたものの高熱が出て、結局母だけが葬式に出たのだった。
「この町にはおっきな病院もないし…そのときはどうすることもできなかった。暫く落ち込んでたけど、最近ようやく医者になるって目標を見つけて元気になったの。だから私は太陽の邪魔をしない。太陽が受験勉強を一生懸命やってることも知ってるし、今は告白なんかしない。だけど、合格が決まったら必ず告白するよ。あんたは突然やってきて、太陽のこと何も知らないくせに太陽の人生めちゃくちゃにする気？太陽が好きなら手を引いて。どっちにしろ、夏休みが終わればいなくなっちゃうんでしょ？難しいことじゃないと思うけど。」
「…。」私は何も言えずにいた。何も言えなかった。
心の中に大きな穴が開いたみたいでスースーする。
難しいことじゃない？…そうなのかな。私にはもう諦めかたなんてわかんない。
今まで諦めたことなんてないし、本気になったことすらなかったから。
…でも。手を引かないと太陽君の重荷になるんだね。「…あたしは実家に住んでるだけ。」私も少しきつめに返事をした。

第17話：何億分の一？

太陽君と新田さんが戻って来ても、私は放心状態で何の会話も出来なかった。

『自分の気持ちに嘘つくような人に太陽を好きでいる資格なんて無いからね。』そう恋敵に言われてしまったから。完敗だよ。

情けなかった。悔しかった。何年も前から太陽君を好きでいたなら、私だって堂々と胸を張って言えたのに。

私は結局ここ2週間程度の太陽君しか知らない。太陽君がいろんなことを乗り越えて、夢を見つけたなんて知らなかったよ。そんなこと言ってくれなかったじゃん。

私は…邪魔になってるんだろうな。蛍なんてのんびり待ってる場合じゃないじゃん。なんで言ってくれなかったの？勉強するって一言、太陽君なら簡単に言えるじゃん。

悔しいよ。自分が太陽君の支えになるどころか、重荷になってたなんて。気をつかっててくれたのかな…そんな優しさいらないのに。

「具合悪いか？」一人黙っていた私に、太陽君は突然問い掛けた。

私は慌てて首を振る。祭が終わったあと、途中まで新田さんのお父さんの車で送ってもらい、今は太陽君と2人で歩いていた。黙ってるなんて気ぃ悪くするよね。

「歩き疲れちゃった。」私はそう言って太陽君に笑顔を見せた。めんどくさい女になりたくない。

「森山になんか言われた？」

「森山…？」あぁ、あの人森山って名前なんだ。名前で呼ばれるなんて羨ましいな。卒業したら付き合っちゃったりするのかな。可愛い子だったもんなぁ…。

「…い。おい！」すっかり考え込んでいた私は、太陽君にチョップされてはっとした。

「何か言われたんだろ？」

「ちっ、違うよ！最近勉強ばっかりしてたから眠くって…。それだけ。」
「ふぅん。」太陽君はあえてそれ以上何も言わなかった。私が嘘ついてることにはきっと気付いてるだろうけど…。
お互い黙ったまま２０分が過ぎた。いつもの沈黙とは違くて、すごく居心地が悪かった。好きな人と一緒にいるのに、今は嬉しいことだなんて感じられない。ただ悲しかった。
家に着くわずか数メートル前、太陽君は足を止めた。不思議に思って太陽君の顔を覗く。
「…蛍。」
「…え？」太陽君の見つめる先には、綺麗に光る蛍がいた。
「ラッキーだな。」太陽君は本当に嬉しそうに私に笑顔を見せた。
「うん…。」私だって嬉しいよ。ずっと待ってたんだもん。でも、これで私の大切だった愛しい時間はなくなってしまう。２人で黙って夜空を見ることも無くなるんだ…。
「麗…？」太陽君がきょとんとした顔で私を見る。
「ふぇっ…。」私は力無く座り込み声を殺して泣いた。
あと何日かすれば太陽君のそばにはいれないんだ。何年かすれば私のことは忘れちゃうんだろうね。太陽君の記憶の何億分の一になれたのかな…？
私にとっても太陽君は私の記憶の中の何億分の一。きっといつか忘れてしまう。消えてしまう。
でも、今はそれがものすごく悲しい。苦しい。
わからないよ。恋なんてしたことないもん。相手を思って身を引くのが恋なの？こんなに苦しくて死んでしまいそうでも、いつか忘れるからと諦めなくちゃいけないの？
わかんないよ…。

第１８話：初恋だから

「ごめん…ね。」鼻をすすりながらそう言った私に、太陽君は黙ってティッシュを渡した。
…恥ずかしい。こんなに取り乱したことなんて今までに無い気がする。
私は鼻をかみながら横目で太陽君の表情を伺った。怒ってる感じでは無いけど…迷惑に思ってるんだろうな。
私は自分のした行動にため息をついた。突然泣かれたら、どうしたらいいかわかんなくなるのが普通だと思うし。
でも…太陽君はしゃがみ込んだ私の手を引き、何も言わず縁側に連れて来た。それは私の理想そのものっていうか…すごくその行動がかっこよく感じたんだ。今だって私が落ち着くまで傍にいてくれるし。
こんなことされたら、諦められなくなっちゃうじゃん。
「落ち着いた？」
「あっ、うん。突然泣いてごめんね。もう大丈夫だから。」無理に私が笑顔を見せると、太陽君は小さくため息をついた。
「ほんとにごめん。泣かれるの嫌いだって言ってたのにね…。」
「別に嫌いじゃねぇよ。困るだけ。」
「ごめん。」私はまた泣きそうになるのを必死に堪えた。これ以上嫌われたくない。…どっちにしろ、あと1週間しか一緒にいれないけど。
「あんたは少しくらいなら泣いてもいいんじゃない。普段我慢してそうだし。」
「で、でもっ…」
「理由は別に聞かないけど、あんたが泣くって相当のことだと思うし。」相当のこと…そうだよ。太陽君を諦めるなんて難しすぎるんだ。私はそんな器用な人間じゃない。不器用な人間だからこそ、い

ろんなことに無関心になって、面倒なことを避けて通って来た。
だから今回も…。今はまだ諦めることは出来ない。きっとここを離れたら少しは太陽君への思いも消えるから…だから、今はまだ好きでいたい。好きでいることを許してほしい。
私の初めての恋だから。

第19話：自信

朝日が眩しくて目を開けた。昨日の服のまま、化粧も落とさずに、私は縁側で寝てしまっていた。ゆっくりと体を起こす。ふっと視界に人の姿が見えて、私は目線を落とした。

「…。」隣には気持ち良さそうに寝ている太陽君がいた。ずっと傍にいてくれたんだ…。

気付かれないようにそっと手を伸ばす。触れた髪の毛は猫の毛みたいに柔らかくて、日に当たっていたせいでほんのり温かかった。起きてしまわないうちに手を引っ込めて、今度は寝顔を盗み見た。

最初は最低な人だと思った。

冷たいし、感じ悪いし、怒らせるようなことばっかり言ってくるし。でも今は、私にとって最高の人。たった2週間程度でここまで人を好きになることができるんだね。でも、この気持ちの大きさはどのくらいか誰にもわからない。自分だってわからない。だから自信が持てなくなる。ライバルに何も言い返せなくなる。

恋に時間は関係ないって言うけど、本当にそうかな？やっぱり長い時間その人を見ていれば、嫌な部分も沢山わかる。それでも、好きだと思える、言い切れるなら自分の気持ちに自信がついてくると思うんだ。

…あの人みたいに。あの人は太陽君の駄目な部分も含めて愛してるって、そう言ってるように思えた。強い眼にしっかりした声だった。勝てるわけがなかった。

私はこれから何年も太陽君と一緒にいて、駄目な部分も沢山見て、それでも今と変わらない気持ちでいれるのかな。きっと本気で付き合えば、それなりに相手の欠点には目がつく。そこを愛せるかどうか。

私は太陽君を美化しちゃってるのかもしれない。

太陽君は私のことをわかってくれる王子様だって思い込んでるのか

も。ここには太陽君以外男の人もいないし、これだけ一緒にいれば当然なのかも…。でも、苦しいよ。ドキドキするだけじゃない。胸が締め付けられるみたいで、息が出来なくて…こんなに苦しいのに、どうして私は自分の気持ちに絶対の自信が持てないんだろう。どのくらい時間が経てばあの人みたいに強い気持ちを持てる？

誰か教えて…。

第２０話：２日前

蛍を見つけてしまった私たちは、もう２人で縁側に座ることはなくなった。着々と帰る日は近づいているのに、全然実感が沸かない。ただ１日１日、純粋にここにいる時間を楽しんだ。太陽君を避けるわけでもなく、近づこうとするわけでもなく。一定の距離を保って。蛍を見ることがなくなった分、太陽君は勉強に時間を費やしているみたいだった。私はその姿を見る度、邪魔になるなよと自分に言い聞かせた。太陽君の夢を壊したくない。だから、迷惑になるようなことはしない。告白だってしない。その日になったらちゃんと笑顔で帰るんだ。

決して私は無理に、好きでいることを辞めようとは思わなかった。でも、あっちに帰ったら時間をかけて太陽君を忘れるつもりでいた。それが１番だと思った。

「飯だぞ。」ノックもしないでドアを開けると、太陽君はそう言った。

「最近ノックしないよね。着替えてたらどうするの？」私は手に持っていたシャープペンの芯を縮ませ、筆箱に閉まった。

「…勉強？」

「あたしだって一応受験生ですから。」

「絶対受かれよ。」なんだか真剣に応援されて私は返事に困った。だって太陽君なら絶対『落ちろ』って言うと思ったから。

「太陽君も頑張ってよ？」

「あんたに言われなくても頑張ってるよ。」近くに来た私の頭を小突きながら、太陽君は偉そうに言った。

「絶対今回だけはあそこに入る。受かりたい理由があるし。」

「うん。」…知ってるよ。私もお父さんが死んだとき、何も出来ない自分が情けなく感じたなぁ。太陽君もきっと悔しくて情けなくて、沢山泣いたんだろうね。

そしてその気持ちから立ち直れたのは、医者になるっていう夢を見つけたからなんだよね。…応援しなくちゃ。
「…あんたさぁ、英語得意なんだよな？」前を歩いている太陽君が突然そう言った。
「うん、まぁ、一応。」
「後で教えて。あんたがここにいれんのもあと少しだし。」ずきっときた。私が目を背けてきたことを、太陽君があっさり言ったから。ちゃんとわかってるつもりなのに…まだ、もっとって、どうしても思っちゃうよ。
太陽君はどうしてそんな平気そうな顔してんのかな。私がここからいなくなること、なんとも思ってないからだよね。
叶わない恋だってわかってても辛いよ…。

第21話：どしゃぶり

「今日が最後だな。」
「…だね。てか、天気悪いね。」どんよりとした空を見上げ、私は泣きそうになるのを堪えた。昨日、太陽君に英語を教えていたときも上の空で…何を話したのか全然覚えてない。ただ、太陽君が淡々としてるのが妙に悲しかった。
「帰る前に蛍見れて良かったな。」
「毎日ここで探してたもんね。」そう。この縁側は私にとって1番幸せな場所だったよ。
「なんか話したいことねぇの？」
「えっ？」
「最後なんだし、盛り上がる話しろよ。」無茶を言う太陽君を困ったように見上げると、いつものように悪戯っぽい笑顔を向けられた。盛り上がる話なんてないよ。私の中は悲しい気持ちでいっぱいなんだから。
「あんた寂しいんだろ？」
「ちっ、違うよ！」とっさに可愛くない返事をしてしまった自分に落ち込む。
「可愛くねぇー。」
「どうせあたしは可愛いげないよ。元カレにもそう言われ続けてるし。」
「…ふーん。それは男も悪いんじゃね？付き合ったことねぇからよくわかんねぇけど。」
「悪くないよ。自覚はあるから。あたしホントに無関心だったし、結構あまのじゃくだし。」私がそういうと太陽君は返事をしないで、ただ空を見ていた。
「雨、降ってきた。」
「…ホントだ。」まるで私の心みたいだね。今、太陽君から離れた

くないって心が泣いてる。きっと部屋に戻ってしまえば、明日の朝さよならするくらいで…もう会えなくなっちゃうから。
「俺、雨嫌いなんだ。なんか暗くなる。」
「そう？あたし結構好きだよ。冷たくて気持ちいいから。」そう言うと太陽君は呆れた顔で私を見た。
「馬鹿の感想だな。」やれやれといったようにため息をつく。
「まぁ、天気のほうが気持ちいいけどね。」
「太陽があったほうがいいだろ、やっぱ。」
「うん。…太陽って名前だから雨だと元気でないのかなぁ？」
「あー、かも。」太陽君はこくこくと頷いた。本当に太陽君は暖かくて、大きくって太陽みたいな人だね。
「太陽っていい名前だね。」
「あんたもいい名前じゃん。綺麗の麗でしょ？まぁ、名前負けしてるけど。」
「…本当に失礼な人だよね。」私がムスッとしてると太陽君は横で小さく笑っていた。
「嘘だよ。俺もあまのじゃくだから。」
「へ？」びっくりしてる私を置いて、太陽君は部屋に戻った。なんだかドキドキする。でも、嬉しいことを言ってもらったのに、結局は…。さよならを言うのが怖い。こんな思いをするなら出会わないほうがよかったのかな？でも、そんな風には思いたくないんだ。この出会いが私を成長させてくれたんだって、そう思いたい。
雨は一層強さを増して、妙に悲しい音に聞こえた。

第２２話：停電の夜に

夜の１２時過ぎ。ちょうど勉強が一段落した私は布団を敷いた。今日は早く眠りにつこう。余計なことばっかり考えて、悲しくなる前に。

「雨、やまないなぁ…。」外は嵐のように雨風が吹き荒れている。さっきから何度か雷も聞こえた。雷は平気なわけじゃないけど、まだ堪えられる。それよりも怖いのは…。私は急いで布団を敷いて電気を消そうとした。

「きゃっ。」一段と大きな雷が鳴ると、電気は勝手に消えて真っ暗になった。私は泣きたくなるのを必死に堪えて携帯を探した。携帯の光があればなんとか…。そう、私は暗いところが苦手なのだ。だから寝るときは必ず豆電にしていた。停電なんて何年ぶりだろう…。私はどうしたらいいかわからずあたふたするばかりだった。焦っているせいか、携帯も見つからない。

なんでこんなめにあわなきゃいけないの？ただでさえ今辛いのに、こんな怖い思いしたくないよ！恐怖とむしゃくしゃした気持ちのせいで、涙は知らぬまに流れていた。

「麗？」いきなり眩しい光を浴びて私は顔を背けた。この声は太陽君…？

「あんた泣いてんの？」ライトを私の顔からずらし、太陽君は少しずつ近づいて来る。

「大丈夫かー？」こんなことで大泣きしている自分が恥ずかしくて、私は何も返事が出来ずにいた。

「あんた確か暗いとこ苦手だったような気がしたから、これ持ってきた。」太陽君はしゃがんで私の手にライトを持たせた。もう、行っちゃうのかな…やだよ。怖いよ。

「電気いつ回復するかわかんねぇし、とりあえずこれつけて寝とけ。」私が泣いているからか、太陽君の声はいつもより優しい。すごく

安心する声のトーン。
「なんかあったら、ばあちゃんか俺んとこ来いよ？」そう言うと太陽君は立ち上がって背を向けた。歩き出そうとする太陽君の足を、私は無意識のうちに引っ張っていた。
「わっ。何だよ、あぶねぇだろ。」
「…かないで。…やだ。置い、てかない、で…」泣きながら必死に訴える私の横にに、太陽君は黙って座った。震えている私の手を太陽君がぎゅっと握る。
「これで、ちょっとは怖くねぇだろ。」ぶっきらぼうな言い方から、太陽君が照れてるのが伝わってくる。そうだよね…きっと女の子にこんなことしたことないよね。間接キスしたくらいで尻軽呼ばわれされたもんね。なんか調子のっちゃうよ…なんでこんなに優しくしてくれるの？女の子嫌いって言ってたじゃん。
「寂し…い。あた、し…ずっと、ここ、にいたい…」ひっくひっくと肩を揺らしながら必死に話す私を、太陽君はためらいがちに抱きしめた。びっくりして一瞬息が止まった。心臓が口から飛び出そうな感覚ってこんな感じ？キスをしたわけじゃない。エッチをしたわけじゃない。それなのにこんなに早く心臓は動くんだね。太陽君は右手で私の髪をゆっくりと撫でる。小さい頃よくお父さんにやってもらってたなぁ…。安心する。太陽君の一挙一動が私をドキドキさせたり、安心させたりする。これが恋なんだね…。私今、幸せだよ？
「もう泣くなよ。ここにいんだろ。」
「だって…うれ、しくて…」
「どこがあまのじゃくだよ。…すげぇ可愛い、し…。」太陽君は雨の音に掻き消されてしまいそうな声で、そう呟いた。
「えっ…？」聞き間違えたのかと思い、太陽君の顔を見る。
「俺、あんたが初恋っぽい。」ぐっと心臓を掴まれたみたいに苦しくなった。それって私を好きってこと…？私は太陽君から目を反らせずにいた。でも、なんて言っていいのかわからなくて…ただ涙の溢れる瞳でずっと太陽君を見ていた。太陽君が私の前髪をかきあげ

て、そっとおでこにキスをした。恥ずかしそうに私を見る太陽君がすごく愛おしくて、可愛く思えた。おでこにキスされるだけで今びっくりするほどドキドキしてるよ。私も太陽君が初恋だよ。私の溢れる涙を親指で拭って、今度はほっぺにキスをした。テンパって何も言えない私の気持ち、もうばれちゃってるのかな。太陽君には見透かされちゃうのかな。それともこの心臓の音が聞こえてる？次に太陽君がどこにキスしようとしてるかわかるよ。太陽君と私は照れながらもずっと見つめ合っていた。

最初に目をつむったのは太陽君。それが合図だったかのように私も目をつむった。

触れたか触れないかわからないほど、優しいキスだった。

その夜、私たちは手を繋いで眠った。泣き付かれたせいなのか、よくわからなかったけど、太陽君の隣だとすぐ眠りに付けた。

間違いなく、太陽君は私の初恋でした。

第２３話：答え

深い眠りから覚めたのは早朝６時過ぎだった。いつもなら早起きの太陽君も、今日はなかなか目を覚まさない。
すごく幸せだった。好きな人と一緒に眠ることが、こんなに幸せだなんて知らなかったよ。ありがとう。
私たちは両想いなのかな？昨日告白してくれたのかな？
でも…私は遠距離なんてする自信ない。
会いたくなるに決まってる。声だって毎日聞きたくなる。でも、それは簡単にはいかないこと。ここは電波入らないから、携帯なんて持ってても無意味だし、第一太陽君携帯持ってないし…。会いに行けるのも休日に限られる。電車賃だって馬鹿にならないし、受験生の私たちにはバイトする余裕もない。ほとんどお互いのことわからないまま時間が過ぎていくなんて虚しいよ…。
太陽君は離れてても平気なの？会えなくても声が聞けなくても、今と同じ気持ちでいられる？私は…そんな自信ないよ。
太陽君の寝顔を見ながら、私は一筋の涙を流した。中途半端な自分にムカついたから。太陽君と付き合う自信がないなら、なんでキスしたりしたんだろう…。今更どんな顔すればいいかわからないよ。
「ごめんね…。」自然と口からこぼれていた。
太陽君が私と付き合うつもりでいるかどうかはわからないけど、私はやっぱり太陽君とは付き合えない。きっと私は太陽君の優しさに甘えてわがままばっかり言っちゃうんだろう。私は太陽君を好きになって自分がこどもだって気付いたんだ。
だから、太陽君の夢を壊してしまうかもしれない。それにわがままばっかり言ってしまったら、太陽君は段々私を疎ましく思うんじゃないかって考えたら…怖くなった。
もし出会ったのがもう少し後だったら…今とは違う答えが出せたかもしれないね。でも、大事なのは今で…。

私の中で答えはもう1つしかないんだ。

第２４話：別れの時

「また遊びにこらい。」
「うん。」おばあちゃんの柔らかい手を握りながら、私は大きく頷いた。
「おばあちゃんも光代さんも元気でね。」少し寂しそうな顔をする2人を見たら、思わず私は涙ぐんでしまった。そんな2人の横で太陽君は何も言わずに立っている。私の気持ちを探るように…。
朝、私が髪の毛を乾かしていると、ドライヤーの音がうるさかったのか、太陽君はゆっくりと体を起こした。
そんな太陽君に、私はまるで何もなかったかのように接した。何にもなかったことになんか出来ないってちゃんとわかってた。でも、私はそうしようとした。…それが1番だと思ったから。
そんな私の態度を見て違和感を感じたのか、太陽君は何も言わずただじっと私を見ていた。なんだか見透かされてしまいそうで、私は気付かないふりをして支度を済ませた。
そして今…こんな中途半端な感じで最後を迎えようとしている。さよならを言うのが怖くて、さっきからずっと太陽君を見れずにいた。
「じゃ…」大きく息を吸って最後の言葉を言おうとした時だった。
太陽君は私の足元にある荷物を持ち、駅の方へと歩き始めた。
「えっ、ちょ…」
「たいちゃんに送ってもらいなぁ。」
「あ、いや、でもっ…」私が慌ててる隙にも太陽君はどんどん進んでいく。これはもう諦めるしかない。
「あっ、じゃあ、帰るね。元気でね！」私はおばあちゃんたちの笑顔を、しっかりと目に焼き付け太陽君の元へと急いだ。
「太陽君！あたし、一人でも帰れるから大丈夫だよ！」太陽君に追い付いた私は、そう言って太陽君の持ってるバックに触れた。
「あんたどういうつもり？」

「えっ？」
「なかったことにするつもり？」少し低めの声で話す太陽君。ちくちくと胸が痛む。
「キスしただけじゃん！思い出だよ、思い出。」私はあえて軽々しくそう言った。作り笑顔が引き攣る。
酷いことを言ってると自分でもわかった。でも、中途半端なことを言ってしまえば、きっと私の気持ちなんてばれてしまう。いっそ怒られたほうがマシ、そう思った。
「…本気で言ってんの？」
「…じゃあ、太陽君はあと何分かすれば会えなくなっちゃうあたしを、本気で好きなの？」
「俺は好きじゃねぇ女にあんなことしない。」
少女漫画でよくある『きゅん』ってやつ…今実感した。なんでこれから離れるって時に、この人はこんなにかっこいいんだろう。
「あ、あたしは、始めからこの夏限定のつもりだったし…。」
苦しかった。嘘をつくのに良心が痛むのはわかるけど、今はなんだか苦しさの方が大きい。
「…わかった。」
太陽君はそう言うとそれっきり口を開かなかった。こんなことを言ったらてっきり怒って帰っちゃうと思ってたけど、太陽君は私の荷物を決して降ろしたりしなかった。
これが太陽君の優しさ。本当はムカついてるよね。最低な女だと思ってるよね。…ありがとう。
心の中でそっとお礼を言った頃、ちょうど駅に着いた。
今は３３分。あと２分したら電車が来て、私は太陽君から離れなきゃいけないんだ…。
「荷物ありがと。」気まずい空気の中発した私の声は、心なしか震えていた。太陽君は何も言わず、肩にかけていたバックを私に差し出す。受け取ったら終わりなんだ…そう思うと、なかなか手が動かなかった。

力を振り絞って荷物に手を伸ばすと、太陽君はその手をがっしりと掴んだ。
「えっ、な、何？！」
「やっぱり納得いかねぇ。あんた嘘ついてんだろ。」
「嘘なんかついてないよ！」私は慌てて太陽君の腕から逃れる。強く握られた手は少しだけ痛んだ。
「あんたはそんな軽い女じゃない。」
「何でそんなことわかるの？あたしはそんなにいい子じゃない。買いかぶりすぎだよ…。」
私は涙を必死に堪えながら呟いた。たぶん人気のないホームだから十分聞こえたと思う。
早く電車が来ればいいと思った。これ以上嘘をつくのは辛い。隠し切れなくなってしまう…。
「ちゃんと俺の顔見て言えよ。」太陽君の訴えに私は首を横に降る。泣きそうに歪んだ顔を、太陽君に見られたくなかったから。
「ホントに遊びのつもりだったのかよ！」太陽君の悲痛な叫びは、電車の音で掻き消された。私はぐっと唇を噛み、太陽君が油断している隙に荷物を引っ張った。その荷物は意外にも簡単に私の手の中に戻り、私は勢いのまま電車に乗り込む。
「麗！…最後だろ。こっち向いて。」太陽君は優しくて、でもとても寂しそうな声でそう言った。私はずっと振り向けずに、ただドアの前で立ち尽くしていた。今すぐ電車から降りて、太陽君に抱き締められたい。本当は好きと言ってしまいたい。
でも、私にはそれができなかった。太陽君の夢を壊すのが怖い。裏切るのも裏切られるのも嫌。まだ何の自信もないよ…。私たちはきっと出会うのが早過ぎたね。
別に2度と会えなくなるわけじゃない。でも、あんな時間はたぶんもう過ごせない。
太陽君と過ごした夏はとても愛おしい時間でした。
ピーっと音がなり、私と太陽君の間に一枚の壁が作られる。

「麗！」ドアが閉まっても太陽君は私の名前を呼んでいた。このまま離れるなんてもちろん私だって嫌だ。でも、泣き顔でさよならは言いたくない。早く笑わなくちゃ…。
一生懸命涙を止めようとしたけど、神様はそんな時間を与えてはくれなくて…電車はゆっくりと動き出した。
「好きだ！あんたがめちゃくちゃ好きだ！忘れられねぇよ！」電車の音に負けないくらい力強い声で、太陽君は叫んだ。
あたしだって…離れたくない！
私は顔中をくしゃくしゃにして泣いたまま振り返った。ドアの外の太陽君と目が合う。
太陽君はぎりぎりまで電車を追いかけてくれたけど、私は結局窓に張り付いて太陽君を見ただけで何も言うことができなかった。
本当に終わったんだ…。なんだか自分の中身がからっぽになったみたいだった。力無くその場に座り込む。
「好きだよ…。」もう届くことの無い私の声は、ただ宙を舞った。

第２５話：もしも運命なら…

「そんなことがあったんだぁ…。」ファミレスの席に向かい合って座っていた悠乃は、しんみりとした表情でそう言った。
「電波通じないからって、ここ１ヶ月くらい何にも話聞けなかったから…」私は地元に帰って来てすぐ悠乃にメールをした。それが、実家に帰る前に２人で交わした約束だったから。
「麗、変わったね…。きっと前までの麗ならこんな話してくれなかった。」
「そんなことないよ。」
「あるよぉ。あたし寂しかったもん。」少しふて腐れた顔をする悠乃に、私は微笑んだ。
確かに悠乃の言う通かもしれない。前までの私はあまり自分のことを話したがらなかったから。
太陽君に恋して、素の自分でいることに慣れてしまったのかもしれない。それに興味がなさそうだとか、つまんなそうって相手に思われて寂しい思いをさせたくなかった。悠乃が素の自分を見せてくれるように、私も素の自分で付き合いたいと思った。
「麗の気持ちわかるけど…でも、両想いなのに一緒にいれないなんて、やっぱり悲しいよ。」
まるで自分のことのように、泣きそうになりながら悠乃は言った。
「あたしもまずは保育士になる。それまでは恋愛は無しでもいいかな。」
「麗、辛くないの？」悠乃の問いかけに私は静かに首を振った。
「辛いけど、あたしが泣くのは変だと思うんだよね。被害者面してんなって感じだし。もう沢山泣いたしね。」
「本当に無理してない？あたし、麗が強がりなこと知ってるんだから。」
「んー。無理してないわけじゃないけど…今日は大丈夫。もし、辛

い時があったらちゃんと悠乃には言うから。」
太陽君は今どんな気持ちでいるのか、考えたら少し悲しくなった。
でも、太陽君ならちゃんと前に進んでそうな気がする。そんな考え自己満足にしか過ぎないんだろうけど。
「それにね…。もし、この出会いが運命だったら、またどこかで会えるかもしれないじゃん？だから、あんまり悲しくない。まぁ、こんなこと言って一生会えないかもしれないけどね。」
「きっと会えるよ！だって麗を変えてくれた初恋の人なんだもん！」
そう前のめりになって言う悠乃に、私は親指を立てて見せた。『今時こんなポーズ？』なんて2人で笑いながら、しばらく悠乃と話をしていた。不思議と話せば話すほど気持ちが軽くなるようで、ただ好きってことだけがはっきりと自分の中に残っていく気がした。
もしもこれが運命ならまた会える気がするんだ…だから、悲しくないよ。

第２６話：イチゴ味

着慣れないスーツを身に纏い、桜並木の下を歩く。今日は大学の入学式だ。
太陽君のことを考えない日はなかったけど、不思議と勉強ははかどった。おかげで私は無事志望校を合格することができた。ただ、悠乃と進路が違うのは寂しかった。
「麗ちゃん。おはよ。」
私の肩を叩き声をかけてきたのは、唯一同じ高校から入った恭子ちゃんだった。あまり親しくしてなかったけど、明るい人なのですぐに打ち解けられそうだ。
「おはよ。スーツ似合ってるね。」
「えー、嫌味ぃ？麗ちゃんの方がめっちゃ似合ってるよー。」
なんだかちょっと悠乃に似てるかも…。思わず私はくすりと笑った。
「えっ、何？」
「何でもない。入学式緊張するね。」
「うん。かっこいい人いるといいね！」
「えっ、そこ？」私の台詞に恭子ちゃんは八重歯を見せて笑った。可愛い人だなぁと素直に思った。これから仲良くやっていけたらいいな。
「…ね、あの人麗ちゃんのこと見てない？一目惚れかなぁ？」にやにやと笑いながら恭子ちゃんは私の肩をつつく。
「そんなの有り得ないよ。」そう言いつつも私は恭子ちゃんの視線の先を探した。
「…。」何メートルか先の桜の木の下に見慣れた男の人が立っていた。
『もしも運命ならまたいつか会える気がするの…』
「麗ちゃん？」立ち止まる私に、恭子ちゃんは不思議そうに問い掛けた。

何でかな。こうなる気がしてた。また会える気がしてたの。なのに、体が動かないや…。
見慣れた男は静かに近づいてくる。恭子ちゃんは何かを感じたのか、私の背中を押してその場を去っていった。私たちの間に懐かしい時間が流れる。まるであの頃に戻ったみたいに。
「偶然じゃないからな。」
「へ？」太陽君の意味不明な台詞に、私は気の抜けた声を出した。せっかく再会して一言目がそれ？
「俺、元々ここが志望校で、あんたを驚かせようと思って最後まで黙ってたんだよね。まぁ、そんで言おうとしたら、あんたが訳わかんないこと言い始めたんだけど。」太陽君はあの頃と変わらない、呆れた声でそう言った。
「これでもうあんたの余計な考えはなくなんでしょ？」太陽君はそう優しく問い掛けた。
また太陽君の傍にいれるのかな…夢じゃないよね。
余計なことばっかり考えて、大切な気持ち押し殺して…そんなんじゃ幸せになんかなれないよね。
人を好きになるっていうことは簡単なことじゃない。誰もがみんなそんな想いを抱ける相手に出会えるとは限らないよね。大切な大切な出会いなんだ。
不安で当たり前。
自信がなくて当たり前。
全部完璧じゃなくていい。だって、これから2人で作っていくものだから。
「今度は正直に答えろよ。…俺のことどう思ってんの？」
「…好きっ！」涙を流しながら言う私に、太陽君は今までで1番の笑顔を見せた。
そう、まるで空に輝く太陽の様に。
その後、路上で派手な告白をした私と、そのお相手の太陽君は大学

で有名なカップルになった。そりゃ、あんだけ目立てば当然の結果だけど。

ねぇ、太陽君。
あなたは私の太陽だなんて臭いことは言えないけど、ずっと私の隣で笑っていてね。
私は向日葵の様に太陽君だけ見つめてるから。

お互い初恋同士のこの恋は、なんだか回り道もしたし、複雑なことも考えちゃったし、うまくいかないことも沢山あったけど、きっといろんなことを一緒に学んでいけるね。

私の初恋が太陽君で良かったよ。
私の初恋。
甘くて酸っぱいイチゴ味。

第２６話：イチゴ味（後書き）

第2作目書き終わりましたぁ！今回は自分の体験したコトの無いような恋愛だったので、書くのが大変でした。。
でも、私の知らない色んなところで色んな恋が芽生えてるんだろうなぁ…と思い、今までにない恋愛を書いてみました☆　　次回は自分の身近な人の恋愛を小説にしてみたいと思います！
読んで下さった皆様、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0171c/

初々

2010年10月21日22時25分発行